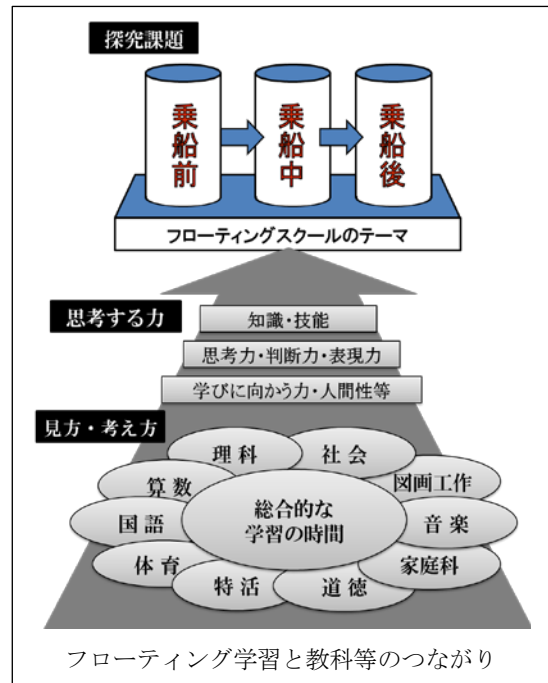


教育内容

(1) 「フローティングスクール学習」を進めるにあたって

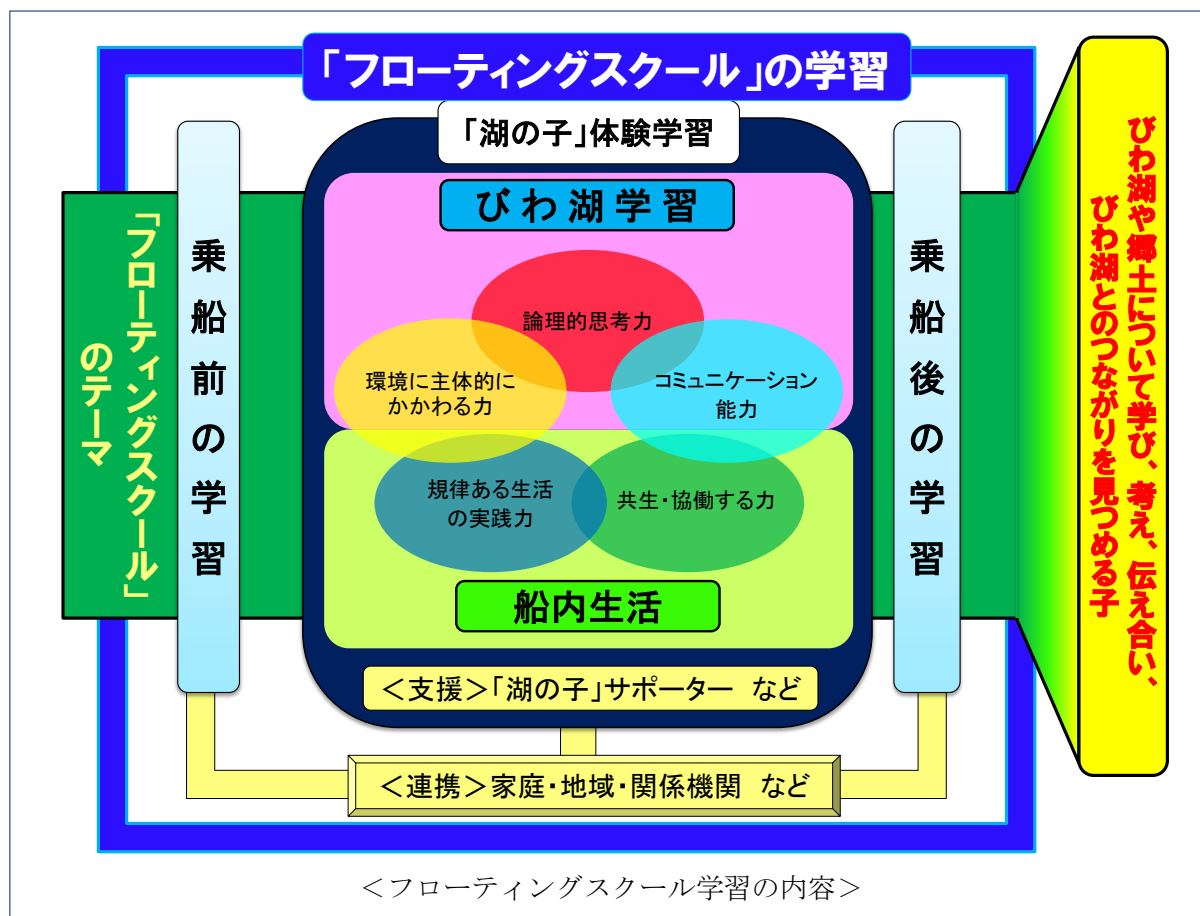
学校での学習と同様に、「フローティングスクール学習」でも、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、フローティングスクールのテーマについて探究することを大切にしたい。そして、各教科等の特質に応じた見方や考え方を活用して、知識を関連付け深く理解したり、情報を整理・分析したり、問題に対する解決策を考えたり、自分の考えを表現したりして、学習の充実を図っていく。



そのために、航海期ごとに行われる指導計画作成会議においては、同時乗船校の教職員が協議しながら指導計画を作成する。そこでは、実現を目指す「目標」を「**目指す児童の姿**」として描く。また、目標を実現するにふさわしい探究課題および探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の「内容」を「**フローティングスクールのテーマ**」として設定する。その上で、単元として実際に児童が行う学習活動を決定する。もちろん、学習であるため各教科等の観点から、指導方法・学習の評価・指導体制も検討する必要がある。「**フローティングスクール学習**」では、乗船前から乗船後まで一貫したテーマを設定し、そのテーマを柱として、さまざまな学習活動とつなぎながら、各校の目標である「**目指す児童の姿**」に迫っていく。

特に、学習船「うみのこ」で学習を展開する「湖の子」体験学習では、テーマでつながる乗船前・乗船後の学習を意識した内容となるように、乗船校教職員の創意工夫が求められる。航海をする船内での湖上活動という特別な学習環境を生かしながら、児童がこれまで培ってきた物事の見方や考え方から、思考を深めたり新たな考えを生み出したりすることができる学習の展開を期待する。

(2) フローティングスクール学習の内容



前述のとおり「フローティングスクール学習」は、各校の教育課程において、乗船前から乗船後までを含めた一連の学習として位置付け、単元の指導計画と評価規準を構成するものである。つまり、学校教育から独立したものではなく、各学校がフローティングスクールを活用し、各校独自の特色ある教育活動を進めていくものである。

びわ湖フローティングスクールでは、フローティングスクール学習の指導計画を作成するにあたって、乗船前の学習・乗船中の学習・乗船後の学習のそれぞれで、各校が考える「目指す児童の姿」を段階的に設定するとともに、それらを反映し、単元を通して取り組んでいく「フローティングスクールのテーマ」を設定することを重視している。各校の教育目標を考慮した指導計画を立て、実践していくことで、フローティングスクールを活用した特色ある教育活動になると考えている。

そして、計画された教育活動をことさら深めていくことができるのは、学習船「うみのこ」で過ごす2日間である。船の中やびわ湖ならではの体験学習、複数校での乗

船で生まれる協働的な取組が、児童に大きな影響を与え、貴重な学びや経験として残っていく。乗船中の学習では、日常の学校教育では味わえない“本物体験”・“感動体験”を通して、主体的・対話的に学びを深めていくことが重要となる。

乗船する2日間の学習を『「湖の子」体験学習』とし、『びわ湖学習』や『船内生活』などを通じて、さまざまな力の育成を図っていく。

『びわ湖学習』は、主にびわ湖や郷土を教材とした体験学習および交流学习であり、学校教育の中の総合的な学習の時間や各教科の学習等に位置付けて取り組むものである。また、『びわ湖学習』は、対話的な学びを進めるためのコミュニケーション能力や、主体的に追究するための論理的思考力を培うとともに、環境に主体的に関わる力を育てていくことを目標としている。それぞれの学校や児童が設定した課題に対して、主体的・対話的に学びを進め、自ら課題を追究する探究的・協働的な学習を、各教科等で培った見方や考え方を使ったり、新たな発見や考えに出会ったりしながら、人とびわ湖とのつながりや生き物同士のつながり、びわ湖の素晴らしさ等を感じ、知り、考え、共有できる2日間としたい。

『船内生活』は2日間の学習の基盤となる大集団の共同生活全般を表すもので、特別活動や道徳の学習と関わる内容として位置付けることができる。規律ある学校生活と同様に、規律ある生活の実践力や共生・協働する力を、船内での生活という限られた空間・時間の中で、自他の生命を守るための安全行動等を通して培っていく。

さらには、「フローティングスクール学習」を、家庭や地域とも連携しながら展開していく。

